

Amir Tsarfati 氏の中東アップデート 2016 年 10 月 27 日公開

ユネスコの決議、神殿の丘

.....
紅海近郊の町・エイラートより、シャローム！ライブでコメントをお伝えするというお約束の通り、エルサレムに関するユネスコの決議について、聖書にはどう書かれているのか、預言的にはどうなのかをお話する。

背景を簡単に説明すると、数日前、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）がパレスチナ人・ヨルダン人の訴えを受け入れた。内容は彼らがアラブ語で「ハラム・シャリーフ」と呼ぶアル＝アクサー・モスクで、イスラエルが敵対行為を行っているというものだ。そこにはかつて、神殿が建っていた場所で、神殿の丘である。この決議の何に驚くかというところ、ここがユダヤ教の神殿の丘であるということが全く伝えられていないという事実である。実際のところ、神殿の丘の周りで我々が行っていることはすべて、丘の上ではない。丘の上は現在、イスラムが実権を握っているから、その周辺でユダヤ人が行っているのは、その場所でのユダヤ人の過去や、ユダヤ人の相続、そしてユダヤ人の記念の発掘である。

面白いことに、よく「ユネスコの決議をどう思うか？」とか、「これからどうなると思うか？」とか、「これに関して、聖書は何か預言しているのか？」という質問を受ける。それについて、私の答えは「たくさんある」「まったくもって、その通り」。聖書はこれに関して語っていて、だからこそ私は ライブでこれをお伝えしようと思ったのである。

まず第一に、私たちが理解すべき事は、エルサレムが重要な町となったのは、他の何ものでもなく、イスラエルの神・主ご自身が、主の御住まいとしてこの町を選ばれたからである。事実、第二歴代誌 6:6 にはこう書いてある。

ただ、エルサレムを選んで、そこにわたしの名を置き、ダビデを選んでわたしの民イスラエルの上に立てた。（第二歴代誌 6:6）

つまり、神と町との繋がりだけではなく、人もこの町に繋がっているのだ。これを理解しておくのはとても重要で、神は聖書の中で実に明確に書かれている。神が、その町を選んで、そこに御名を置かれた。これはイスラエルの神・アブラハム・イサク・ヤコブの神である。その神が、ダビデ王を選んだと言われているのである。パレスチナ人ではなく、アラブ人でもなく、ムスリムでもない。この聖句に、はっきりと書かれている。

次に、私たちが目撃しているもの、それは 2 日前に通過した決議で、2 週間ほどまえに容認された決議の少し緩くなったものである。基本的に私たちが目撃しているものは、世界の

諸国が、このエルサレム問題について、非常に恐れを抱いて触れることすらできないでいる、ということである。幾人かの人から、「投票は内密に行われたのか？」という質問を受けた。これについては、誰が何に投票したのかはわからないようになっている。それでも皆が恐れている。とても、恐れている。これについての聖書の記述が面白い。

*見よ。わたしはエルサレムを、その回りのすべての国々の民をよろめかす杯とする。…
その日、わたしはエルサレムを、すべての国々の民にとって重い石とする。
(ゼカリヤ書 12:2~3)*

これは、預言の書ゼカリヤ書 12 章と 14 章に書かれていることである。

さて、アラブ人、ムスリムたちは、ここは彼らのものだと主張する。自分たちの相続地、自分たちの古代からの地だと。彼らは岩のドームが、ムハンマドが昇天した場所であり、それから神がアブラハムに、イサクならぬイシュマエルを捧げさせるために、そこに行かせたというのだ。面白い！明らかに二つの異なる話が登場していて、一つは旧約聖書にあるアブラハムがイサクを捧げた話（創世記 22 章）、もう一つは新約聖書のイエス昇天の話（使徒の働き 1 章）。この両方をムスリムたちは取り上げ、どうにか混同させて、自分たちの文化の中で全く違った話捏造した。

さらに面白いことに、コーランの中には、エルサレムについての言及がただの一度も出てこない。コーラン自体、ムハンマドの死後 100 年を経過してから書かれたものである。ムハンマドはエルサレムについて語っていない。“The Night Journey of Muhammad” の話を、それがエルサレムだとする補足記述が出てきたが、ムスリム神学者の中には“The Night Journey of Muhammad” はメッカからメディナの話で、エルサレムとは何の関係もないという人もいる。

それはともかく、よく注意して見ていくと、神がご自分のものだと言われたものはすべて、神がご自身の御名を置かれたものは何でも、敵はそれを取り上げて自分のものにしたいのだ。第一日目から、敵は自分が神のようになりたかったのだ。だから、第二歴代誌 6:6 に書いてある通り、神はエルサレムをご自分の町に選ばれ、神の民イスラエルに与えられたので、敵はその全くの逆をほしがることがわかる。敵はエルサレムをイスラエルから取り上げて、イスラエルとエルサレムとの関係を否定して、そこは他の誰かのものだと主張したいのである。

多くの人が預言者ネヘミヤを知らない。

ネヘミヤ記 2 章。ネヘミヤはシュシャンにいて、当時のペルシャの王に仕えていた。その時

彼は、エルサレムに行って、神殿を再建するための許可を王から得ただけではなく、必要な材料、人手などすべてを与えられた。王は許可しただけではなく、それを手助けしたのである。私はいつも言うのだが、イラン人もこれを知っていれば、と思う。現在、これだけイスラエルを憎んでいるのに、自分たちがエルサレムに神殿を再建するのを助けたと知れば、きっと心臓発作を起こすことだろう。何はともあれ、ペルシャの王自らが、ネヘミヤが神殿の再建に行くことを許されたことを、皆さんに伝えたいのだ。

面白いのが、2章のネヘミヤの発言である。

18…「さあ、再建に取りかかろう」と言って、この良い仕事に着手した。

19ところが、ホロン人サヌバラテと、アモン人で役人のトビヤ、および、アラブ人ゲシェムは、これを聞いて、私たちをあざけり、私たちをさげすんで言った。

「おまえたちのしているこのことは何だ。おまえたちは王に反逆しようとしているのか。」

20そこで、私は彼らにことばを返して言った。「天の神ご自身が、私たちを成功させてくださる。だから、そのしもべである私たちは、再建に取りかかっているのだ。しかし、あなたがたにはエルサレムの中に何の分け前も、権利も、記念もないのだ。」

(ネヘミヤ記 2:18~20)

まず第一に、聖書の中に出てくるアラブ人、アモン人とは、現代のヨルダン人、そして、ホロン人とは、ヨルダンからイラク、そしてアラビアまでの全地域で、アラブ人はもともとそこから出ている。そして彼らはネヘミヤがエルサレムに行き、神殿を再建するのを見てあざけり、さげすんでいる。そして、彼らは「お前は一体何をしているんだ？王に反逆するのか？」と言っている。王はネヘミヤを行かせ、援助しただけでなく、ネヘミヤが王に仕えて行ってきた良い働きに対して、王のやり方で返しているのである。それをアラブ人は反対にとって、ネヘミヤが王に逆らってそんなことをしている、と言うのだ。それに対してネヘミヤは「私は王へ反逆などしない。ただ、王の望みを行っているだけだ。」と。

そして次に彼が言った言葉はすべてのクリスチャンが聞くべきだと私は思う。

「…天の神ご自身が、私たちを成功させてくださる。だから、そのしもべである私たちは、再建に取りかかっているのだ。」

ネヘミヤが言っているのは、私の神、天の神が私たちを成功させてくださるのだ。だから私たちは再建に取りかかる。殺すのではなく、制覇するのでもなく、私たちは『再建』に取りかかる。ご覧の通り、これが、イスラエルが責められることである。イスラエルは建てることでいつも訴えられている。建設、入植地の建築、周辺の掘削。敵が訴えることは、すべ

てそれを神が私たちに行わせるために送り込まれたことである。

そして、面白いのが、ネヘミヤが敵に向かって言った言葉。

「…しかし、あなたがたにはエルサレムの中に何の分け前も、権利も、記念もないのだ」

ユネスコが訴えているのは「分け前」についてである。しかし、ネヘミヤはアラブ人にこう言ったのである。驚きではないか？2500年前にすでに、誰にエルサレムの分け前があるか、誰に権利があるのか、と言う問題が起こっていたのである。そして、面白いのが、ネヘミヤはこれを、ペリシテ人や西側諸国の人に言ったのではなく、後にムスリムとなるアラブ人に言ったのだ。ということで、エルサレムが誰のものか、誰に分け前があり、誰が権利を持ち、誰に記念があるのかということは、聖書に明確に記されている。これで過去はわかった。

ここまで話したのは、

- ① 神がイスラエルを選び、御名をエルサレムの上に置かれたこと、そして、神の民イスラエルを統治するようにとダビデにお与えになったこと。(第二歴代誌 6:6)
- ② ネヘミヤが神殿の再建のためにエルサレムに行き、アラブ人たちに向かって、彼らには何の分け前も、権利も、記念もないと言ったこと。(ネヘミヤ記 2:18~20)

この中で、ネヘミヤが言った「分け前」というのが、現在ユネスコが訴えていることで、エルサレムの分け前はすべてユダヤ人のものである。ユダヤ人は毎日 3 回エルサレムに向かって祈る。飛行機の中でも、エルサレムに顔を向けて祈る。アラブ人は神殿の丘に登ると、岩のドームにお尻を向けてメッカ（サウジアラビア東部）に向かって祈る。ここで理解しなくてはいけないのは、ユダヤ人にとってエルサレムが重要な理由が、ダビデの町や他の何かではなくて、「神殿」だということである。彼らが年に 3 回、神の御顔を求めて訪れ、捧げものを持って行くのは、神殿、主の家なのだということ。つまり、嘆きの壁でもなく、ダビデの墓でもなく、エルサレムの神殿そのものがユダヤ人にとっての重要な理由である。旧約聖書、新約聖書、どちらの時代にも、神殿はユダヤ人の生活の中心であった。だから、あの場所を特定して、ユダヤ人とは何の関係もないと言うのは、狂気の沙汰で、完全に狂っていることなのだ。

しかし、これは霊的な戦いで、神ご自身がご自分のものだと言われるものは何でも、サタンはそれを自分のものにしたいのである。面白いのは、ゼカリヤ書に書いてある聖書預言の話で、これから何が起こるかということである。ゼカリヤ書 12 章にはこうある。

2 見よ。わたしはエルサレムを、その回りのすべての国々の民をよろめかず杯とする。ユダについてもそうなる。エルサレムの包囲されるときに。

3 その日、わたしはエルサレムをすべての国々にとって重い石とする。すべてそれをつぐ者は、ひどく傷を受ける。地のすべての国々は、それに向かって集まって来よう。

(ゼカリヤ書 12:2~3)

このように、エルサレムは将来確実に争いの中心となる。現在は、難民や国境や他の多くの問題で騒いでいるが、間違いなくエルサレムが中東対立の中心となる。神が、そう語っておられるから。そして、イエスがエルサレムに来られるのは偶然ではない。主の足がオリーブ山に立ち、再び主の御国をそこに創られるのである。「ここはわたしの地だ」と全員に言われるのだ。

ちなみにイエスは、反キリストの脅威から逃れてヨルダンに行くすべてのユダヤ人を従えて来る。イザヤが言ったように、主はエルサレムに戻る時、彼らを一緒に連れて帰られる。その所有者が、その所有地に戻ってくるのだ。

さて、ユダヤ人が戻ってきて、イエスがそこに御国を築かれるとは、どうしてわかるのか？ まず、イエスの本部として千年王国がエルサレムに出来ることは、黙示録 20 章を見ればわかる。また、預言と言えばゼカリヤ書に、一番最後の戦争について書かれている。それを私たちはハルマゲドンと呼んでいるが、詳しく言えば、それはハルマゲドンではない。ハルマゲドンとは、黙示録 16:16 の軍勢が集まる谷の名称で、戦争自体はエルサレムで起きる。聖書にはこうある。

1 見よ。主の日が来る。その日、あなたから分捕った物が、あなたの中で分けられる。

2 わたしは、すべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。町は取られ、家々は略奪され…

3 主が出て来られる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。

4 その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。…

(ゼカリヤ書 14:1~4)

つまり、イエスご自身が戻って来られ、主の足がオリーブ山に立つのである。この旧約聖書の預言は、主イエスご自身がオリーブ山に来られるというものである。そして、面白いのは、主がどのようにして戦われるかである。主はエルサレムに攻めてくる全ての国を相手に戦われる。イスラエルの人々に敵対する者、エルサレムに置かれた彼らの権利に敵対する者に対して、戦われるのである。

面白いのは……もちろん、ここでは多くの血が流されるので、とんでもない日ではあるが……多くの戦いが起こり、多くの犠牲者が出る……しかし、次に起こることを見てほしい。これによると、その直後、イエスが統治し、その戦争は終わる。

16 エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、万軍の主である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上ってくる。(ゼカリヤ書 14:16)

これはラマダーンではなく、イード・アル＝アドハーでも、クルバンでもない。また、カトリックの何かの祭りや、他宗教の祭りでもなく、仮庵の祭りなのだ。主ご自身がエルサレムに御国を創設され、大患難から残ったすべての国々は、毎年仮庵の祭りを祝うためにエルサレムを訪れなければならない。イエスの千年王国は、仮庵の祭りとして成就される。そして、私たちは毎年、主と共に仮庵の祭りを祝うのである。それに、これは象徴的な表現ではなく、文字通りに起こることである。主は毎年来るように命じ、さらにはこのように言われる。

17 地上の諸氏族のうち、万軍の主である王を礼拝しにエルサレムに上って来ない氏族の上には、雨が降らない。

18 もし、エジプトの氏族が上って来ないなら、雨は彼らの上には降らず、仮庵の祭りを祝いに上って来ない諸国の民を主が打つその災害が彼らに下る。(ゼカリヤ書 14:17~18)

すごいことではないか？考えてみてほしい。神は、崩壊したダビデの仮庵を再生させるだけでなく、エルサレムは再建され、イスラエルの人々に返されるのである。それだけではない。神はすべての国々に、毎年エルサレムに来て、仮庵の祭りを祝うようにと命じられるのだ。そして、それに行かないという国はどこでも、雨が降らず、災難が起こる。神がお仕置きされるのである。

次に、神にとってエルサレムとは何なのか？神はエルサレムを、『イスラエルの人々に与え、』主の御名をその町の上に置かれ、ダビデ王にイスラエル人を統治するようにと与えた。主がそう言われているのである。エルサレムは、ダビデが統治する前にはユダヤ人の町ではなかった。そこはシャロンの町とよばれ、エブス人の町で、ユダヤ人のどの部族も所有しておらず、領土もなかった。ということで、そこはダビデが治め、イスラエルの首都となったのである。これはダビデ自身の考えでも決断でもない、神ご自身がダビデを導かれ、そう言われたのである。

(わたしが)エルサレムを選んで、そこにわたしの名を置き、ダビデを選んでわたしの民イスラエルの上に立てた、と神がそう言われたのである。

では、なぜ、国々はこれほど必死になって…これはもう、狂気と言ってもいい…彼らのエルサレムに対する執着は狂気である。実際の話、西側諸国がエルサレムをイスラエルのものと認めている、なんていう話は信じてはいけない。アメリカがエルサレムをイスラエルの首都だと認めているとか…はっきり言うておくと、アメリカはエルサレムに大使館を置いてはいないし、他のすべての国々も同様である。エルサレムに各国の大使館はない。ただし、なんと、国際クリスチャンの大使館がエルサレムにはある！

「私たちはエルサレムがイスラエルの首都だと信じている！」

「だから、私たちはここに大使館を置くのだ！」と、立ち上がったクリスチャンたちだ。

しかし、アメリカ大使館、カナダ大使館、どこでもイスラエルと国交のあるすべての国々の大使館はエルサレムにはない。ドナルド・トランプ（共和党アメリカ大統領候補）が、アメリカ大使館をエルサレムに移すと言っているが、あまり期待はしすぎないように、と言っておこう。同じことはジョージ・ブッシュも言っていたのだ。それから、実際にアメリカ議会は、2000年代前半に「2010年までにアメリカ大使館をエルサレムに移動させなければならない」との決議を通過させている。私が間違いでなければ、今は2016年。未だに実現はしていない。それに対して、どの大統領も、ほぼ半年ごとに大統領拒否権を執行している。

そんなわけで、国々はエルサレムをイスラエルの首都だとは認めていない。ユネスコ、国連は、神殿の丘をユダヤ人の地だとは認めない。しかし、神が最後の決定権を持っておられ、神がその御言葉の中で、そこの所有権を持っているのが誰なのか、また、将来何が起こるのかを告げておられる。

というわけで、皆さん、元気を出してほしい。

この狂った世界で何が起ころうと、私たちは目を天に向けて、贖いが本当に近いことを理解しなければならない。エルサレムまでもが、国々にとってこれほどまでに重い石となっているのを、私たちは目の当たりにしている。

これからエルサレムがどのように世界の大きな問題へと発展していくのか、それで世界がどのように苦しむのかが見えてきた。そして、エルサレムに関わるこれらすべての苦しみは、ハルマゲドンの戦いとして、ゼカリヤ書に記されている。なので、いつも言うことだが、もし11月の中旬、通りでクリスマスライトを見かけるようになったら、感謝祭がすぐそこまで来ていることがわかる。反キリストの時代に、世界が狂気の沙汰になる様子を今すでに見ているとしたら、そしてすべてが最後に起こる戦争に向かっていっているのを目撃したら、私たちの贖いが近いことがわかるのだ。自分たちは終わりの時代にいる、と。

2000 年前、世界はエルサレムを巡って狂い立ってはいなかった。エルサレムは崩壊され、ユダヤ人は散らされて、誰も気に留めなかったのだ。それが、1948 年以降、世界はエルサレムを巡って狂うようになってきた。イスラエルが、エルサレムの旧市街地に戻った 1967 年以降、世界は目の色を変えるようになった。しかし、現在見えていることは、その両方が合わさったものである。そして、これが終わりの時のしるしであることは、私たちの誰もが理解していることである。

「これは終わりの時のしるしである」ということに加え、さらに信じなければならないのは、今日、私たちに残されている時間は、勝利するための時間、働くための時間、福音を伝えるための時間、御父の業に励む時間である。

それから、これも付け加えよう。旧約聖書は、聖書には不可欠である。旧約聖書なしには、新約聖書は存在しないのである。新約聖書が「新約」であるからには、その前に実際に何かが必要なければならない。そして、理解しなければならないのは、新約聖書の中のもの、何一つとして新しいものではないのである。新約聖書の中にかかれていることはすべて、旧約聖書を解き明かしているのであって、イエスご自身はこう言われている。

「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためにではなく、成就するために来たのです。」(マタイ 5:17)

「…わたしについて、モーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」(ルカ 24:44)

全て、書かれていることは、預言でさえも成就するのだ。だから、ゼカリヤ書に書いてあることも成就する。イエスは、ただ成就する、と言ったのではなく「必ず」成就すると言われたのである。イエスは、成就するために来られ、そして成就される。主がそう言われたのだ。つまり、私たちにはもはや関係のないことのためにイエスが来られたのではなくて、私たちはこれらの約束をしっかりと握って、見ていかななくてはならないのである。そうすれば、私たちにも何が成就されているのかがわかり、何がどうなって達成されるのかがわかるのである。

どうしてこんなことを言っているのかと言うと、ここ 2, 3 日私は、大きな教会の牧師達が「新約聖書がすべてで、旧約聖書はもはや教える必要がない」などと言っているのを聞いていたからである。このような言葉を、アメリカ、または世界中の牧師達から聞くことになるとは。私は本当にウンザリして、また残念に思っている。新約がすべての教えで、旧約が違うなどということ、そんなことはないのだ！聖書全体で、完成された教えである。事実、イ

エスの時代には新約聖書はなかった。しかし、主は旧約聖書を引用し、主が約束や預言を成就されたのである。イエスが引用したのは旧約聖書のみである。当時、新約聖書はまだ存在しなかったのだから。

パウロが引用したのも、ヨハネが引用したのも、全て旧約聖書からである。旧約聖書がもはや重要ではないなんて、新約聖書がすべてだなんて、よくもまあ、そんなことが言えるものだ。教会で、新約聖書と詩篇しかない聖書を持っている人がいるが、私には考えられないことである。彼らは半額しか払っていないことを願うものである。聖書の半分しか持っていないのだから。聖書は、旧約と新約の両方があるべきである。聖書は神の御言葉で、私たちが加えたり、差し引いたりするものではない、その中から何一つとして省いてはいけない（黙示録 22:18~19）。これが聖書である。私たちは創世記から黙示録までを教えなければならない。マタイから黙示録ではないのだ。神の御言葉の扱いには、重々注意すべきである。

例えば、今回の、エルサレムについて理解すること一つをとってみても、新約聖書だけでは見つけることはできないのである。それが始まった、一番初めに戻らなくてはならないのである。ということで、皆さん、御言葉に浸りましょう。

聖書を常に読み、見て、私たちが生きるこの終わりの時代に、神は何を知らせようとされているのか、そして、逸脱しないようにしてほしい。私が現在目の当たりにしているのは、大きな背教である。まさに第二テサロニケで、携挙の前に起こると書かれている通りである。激しい背教だ。もはや、みことばを教えない牧師、全く違うことや、イエスが一度も言ったことのないことを教える牧師。彼らは、イエスの言葉を変え、神の事を変え、聖書が唯一の道だということを否定する者、イスラエルと教会とを置き換えるもの、水で薄めた福音を人々に伝えている。それは、道ではない。人が救われる唯一の道は、神のみことばを理解しているかどうか、神の約束を理解しているかどうかである。そして、神の約束とは、ただ陰気くさくて、落ち込むことばかりではない。私たちには、素晴らしい約束、祝福された希望が与えられている。イエスが私たちに迎えに来てくださるのだ。

実際のところ、我々がなぜ聖書預言を語るのかと言うと、人を落ち込ませ、どんよりさせるためでも、抑圧するためでもなく、人々に希望を与えるためである。人々にエネルギーを注入し、それによって人々が外に出て、主の御言葉を宣べ伝えるようになるためである。なぜなら、残された時間があまりにも短いから。携挙は、多くの人にとって、扉が閉ざされる瞬間になり得ると、私はいつも言っている。ハイ、それまでよ、である。

セカンドチャンスや、またの機会とか、携挙の後とか、絶対にそんなことをあてにしてはいけないのである。一旦携挙が起これば、残された人々は完全に騙されるのである。人々は盲

目になると聖書にははっきりと書かれている(イザヤ 6:10、ヨハネ 12:40) もちろん、144000人が恐らく、ユダヤ人の中で福音を宣べ伝えるだろう。たぶん、ほとんどがユダヤ人に向けてであろう。「今回間に合わなければ、その時でいいや」なんてことを言うてはいられないのである。

今がその時である！

人の子(イエス)は世を裁くためではなく、救うために来られた。

次にイエスが来られるときは、世を裁くためである。決して美しいものではないのだ！

イエスはロバに乗って来られた(ヨハネ 12:14)。

でも、次は馬に乗って来られる(黙示録 19:11)。

ロバに乗って来られた時は、へりくだって来られた。私たちが救うため、ご自身を犠牲にして、捧げ物となるために来られたのである。

次に来られるときには、災いをもたらすため、裁くために来られる。主に敵対し、主に挑む者はすべて、終わりの戦いのときに主が焼き尽くされると、聖書には書かれている。状況は全く異なるのである。

最初は、神の子羊として来られ(ヨハネ 1:29)、次はユダの獅子として来られる(黙示録 5:5)。だから今は、私たちにとって、ただ福音を宣べ伝え、人々に神の御言葉を聞かせるだけではなくて、同時に現在世界中で起こっていることが確実に預言され、前もって伝えられていたことであり、そしてそこに希望があるということである。その希望はイエスにあり、その希望とは主が戻って来られ、その花嫁(教会)を連れて行かれるということ、そのために私たちは何をするのか、私たちは備えないといけないのである。私たちはともし火の油を持っているか？

私たちには、聖霊がある。私たちは確かに救われている。私たちは、主にいのちを捧げたのだから。中には、悲しいと言えよいか、「あなたがもし、新生しているなら、それが起こった日や時がわかるはずだ」と言う人がいる。私が言いたいのはそうではなく、天から生まれる、新生する、ということは、新生しているかどうか自分ではわからないというようなことではないのだ。もし、自分に起こっていれば、わかるものだ。

「…あなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたにわからせるためです」(第一ヨハネ 5:13)

もし、自分が携挙されるかどうか、自分が救われているかどうか、あなたが疑問に思っているなら、恐らくあなたは救われていないのだろう。私たちの救いと確信とは、自分が救われているとわかっているかどうか、その事実に基づくものである。もし、自分が救われているとわかっているなら、それを取り上げることも覆すこともできない。救いが失われることはないのだ。一旦救われたのなら、あなたは救われている。完璧な人なんて誰もいないのだから。我々の誰もがつまずいたり、倒れたりしても、立ち上がってまた前進しなければならないのだ。もちろん、私たちはいつもいつも罪を告白し、悔い改める。でも、前に進まなければならない。私たちは伝統に留まっていることはできない。宗教に留まっていたはいけない。

自分がクリスチャンとして生まれたなんて考えてはいけない。生まれつきのクリスチャンなんて誰もいないのだ。母の胎の中で、すでに新生している人など1人もいない。新生するというこの意味は、母の胎から生まれた後で、何かが起こって、自分が罪びとであることに気づき、自分には救い主が必要であることに気づく。そして、赦しを乞い、聖霊が心に入るようにと祈り、それでようやく、天から新生するものなのである。これが、第二の誕生なのだ。

そして、第二の誕生によって、あなたは第二の死を免れるのである（黙示録 20:6, 14）。なぜなら、誰もが死ぬのだ。生きている間に、携挙に与る人以外は、皆死ぬ。でも、第二の死、裁きの日（黙示録 20:11~15）の、神の裁きの後を私たちは免れたいのである。我々、キリストの中にある者はこの時、裁かれない。永遠の地獄には、絶対行かない。永遠のいのちを得るのである。

そんなわけで、聖書預言を理解することの重要性とは、現在起こっているすべてのことを理解する大切さ、ユネスコで起こっている決議についてさえも、である。現在起こっていることの一つひとつが聖書に向かっている。神が、終わりの時に起こると言われたこと、我々が対処しなければならないことも含めて重要なことは、私たちが現在終わりの日の最後の時間を生きているということ、明確に示すことだ。

今は信じられないような時代だ。我々は産みの苦しみを味わっているのである。地震は頻発していて、つい先ほどもイタリアで地震が起こった（イタリア中部で M5.5 と M6.1 → その後 30 日にも M6.6）。さらに、多くの疫病や、多くの戦争や戦争のうわさを目の当たりにし、耳にして、驚くことばかりである。私たちは備えをして、主の御前に立ち返るべきである。そして私たちは、もうすぐ主の元へ行けることを喜ぶべきである。これは素晴らしいことだ。

どうして、聖書預言を伝える者を、悪い知らせを伝えていると非難する者がいるのだろう。私たちは最高の知らせを伝えているのだ。もし、イエスが来られて、私たちを連れて行くと

いう約束がなければ、私はそれでもクリスチャンでいたかどうかわからない。

この世はとんでもない世界だ。そしてイエスはこの世から私たちを連れだすために来られる。だから備えをするのだ。

今日は撮影をしてきた。現在、「Israel Unveil」（イスラエルの啓示）のパート2を製作中で、どんどん新しい場所に出て行って、聖書の学びをしている。今日は荒野の仮庵のすぐ横、ソロモン王の柱の隣で、素晴らしい時間を過ごしてきた。私たちがそこで聖書の学びをしている間、主は私たち一人ひとりに、天幕で会うことを本当に求めておられることを啓示してくださった。神は私たちに会いたがっておられ、神は私たちと交わりを持ちたいと思っておられるのだ。それが仮庵の祭りのすべてである。もし、あなたがその場にいたいと思うなら、信じよう。それだけである。

皆さん、どうか引き続き御言葉に触れていきましょう。そしてこれからも私たちをフォローしてください。これからも様々な出来事をアップデートしていく予定。

昨日（10/26）はシリアでとんでもないことが起きている。アサド政権が学校を爆撃し、22人の子どもたちと、数人の教師が殺害された。しかし、世界は何も言わず、誰も叱責すらない。国連安全保障理事会も沈黙のままである。かたや、イスラエルが何かをすれば、全世界は発狂して、国連安保理は会議を開き、何かを言わずにはおれないのに。

今日見られたのは、イスラエルに対してはそれが基準であっても、他の世界に対してはまた違う基準がある、ということだ。これは我々にも予想のつくことで、いつものことである。

皆さんも引き続き、元気を出して、信仰を持って頑張ってください。どうか私たちの YouTube チャンネルをチャンネル登録してください。Facebook ライブで話したことは必ず YouTube チャンネルにアップするので、もしライブを見逃した場合には、YouTube でご覧いただけます。また、細心の撮影風景を写真でご覧になりたい方は、Instagram の Behold Israel をフォローしてください。また、ウェブサイトは Behold Israel.org へ。それから、どんどんメールをお送りください。祈りのリストもあるので、お祈りのリクエストがあれば、それも書いて送ってください。

また、来年4月にはクロアチアを訪れることがほぼ決定。以前にも言った通り、ヨーロッパに対する思いがずっとあり、そのためにある週末をクロアチアで過ごし、その次の週末は南アフリカのケープタウンを訪問予定。それから、メキシコ、アメリカ、シンガポール、インドネシア、さらにはフィリピンにも行きます。

神がすごく働いておられ、ミニストリーがどんどん大きくなっているが、全ては、神の人々がもっと神の御言葉を求め、聖書の中に書かれた神の約束を理解するように、との思いからである。神の御言葉を教え、世界で何が起きているかを説明し、それが聖書預言の中でどのように言われ、預言されているか、それらが今日の私たちにどういう意味をもつのか、それを伝えるために私たちはここにいる。

I love you very much!

引き続き、私のためにお祈りください。

健康に問題を抱えています、この撮影を完成させたいのです。それから、家族とも時間を過ごしたいです。それから、近い将来に向けて、準備を整えたいと思っています。

Thank you and I love you All!

イスラエルの紅海・エイラートから、シャローム！

God bless you all,

Shalom!

このメッセージは BEHOLD ISRAEL のイスラエル在住メシアニックジューAmir Tsarfati 氏が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳して YOUTUBE やブログに上げたものを文字化したものです。リアルタイムで知りたい方は、BEHOLD ISRAEL (英語)、「DIVINE US」(日本語)を検索してください。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録する必要を感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。

※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、現在目を患って治療中です。どうか、りょくさんの為にも、お祈りください。

「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにはならない。」ヘブル4:7

メッセージ by Amir Tsarfati/Behold Israel : <http://beholdisrael.org/>

訳 by 木下言波 DivineUS : <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

筆記 by MIHO